本校ユネスコ部の取組が愛媛新聞『地軸』に取り上げられました。

2026.8.22

地軸

「工都」というイメージと異なり、新居浜は自然に恵まれた街だ。別子ラインを別子山地区へと車で走ると、雲のような緑が迎えてくれる▲この辺りが昔、旧別子銅山による伐採や煙害で荒廃していたとは想像できない。山林再生のため、毎年100万本以上の木を植えた事業はよく知られる▲持続可能な開発目標（SDGs）の先駆けと言える植林を断行した住友2代総理事・伊庭貞剛をはじめ、銅山は有名無名の人材を輩出してきた。閉山から半世紀以上たってなお、レガシーは息づく▲先日の新居浜南高校のオープンスクールで、銅山の歴史を学ぶ地域共創系列やユネスコ部の生徒が、登山学習や四阪島ツアーガイドの様子を中学生に説明していた▲3年生でユネスコ部部長の河中龍星さんは「入学前は銅山にも、新居浜にも興味がありませんでした」と笑って振り返る。それが、山の荒廃や煙害といった負の側面にも向き合い、克服してきた先人の業績や先見性に触れ「学べば学ぶほど、この街に誇りを持つようになりました」。もっと魅力を知りたい、知ってほしいという思いから、活動の先頭に立つ。将来は公務員として地域に貢献したいそうだ▲銅山近代化を推進した初代総理事・広瀬宰平は1887（明治20）年の演説で「あなたたちがこの山に来たのは、決して偶然ではない」と呼び掛けた。その言葉は今に通じる。銅山に人が導かれるのは、運命的でさえある。

「地軸」2026 年８月 22 日付愛媛新聞（掲載許可番号：ｄ20260824-02）

JICA地域理解研修の模様も同日の愛媛新聞に掲載されました。

別子銅山 魅力を堪能

外国人研修員 新居浜南高生らと巡る

新居浜南高生（右）の説明を聞く外国人研修員ら

国際協力機構（JICA）の「開発大学院連携プログラム」の一環で、四国の大学院で長期研修員として学ぶ12カ国の17人が、20日まで3日間の日程で新居浜市を訪れ、新居浜南高校生らの案内で別子銅山遺構を巡った。

日本の近代化の歴史を知ってもらおうと、JICAが新居浜市国際交流協会に委託し、同校や市が協力。2023年から同市を訪問している。

参加者は19日、新居浜南高ユネスコ部や国際教養系列の生徒ら約40人のアテンドで、マイントピア別子（同市立川町）の観光坑道を堪能。銅山の歴史、人形を使った採鉱の様子など、コーナーごとに生徒から英語で説明を受けた。

銅山で使われた削岩機やくみ上げポンプの模型に触れ、坑道までを往復するトロッコ列車なども楽しんだ。

「遺産の保全に注力していることに感心した。高校生も工夫して発表してくれ、非常に良かった」とネパール出身で、愛媛大学院に通うサティアル・ケダルさん（41）。同校ユネスコ部で2年酒井愛結さん（16）は「たくさん話し笑ってくれて、夏休み前から準備したかいがあった」と充実した表情だった。

一行は「東洋のマチュピチュ」と称される東平（とうなる）選鉱場なども訪問した。（月岡岳）

「別子銅山魅力を堪能」

2026 年８月 22 日付愛媛新聞（掲載許可番号：ｄ20260824-03）

愛媛新聞 ONLINE（http://www.ehime-np.co.jp/）